

# 2021年 アメリカ学会 第55回年次大会 プログラム

## 1. 開催日

2021年6月5日(土) 6日(日) 主催校:慶応義塾大学

※ 今大会は、Zoom および予備として Webex を使用し、オンラインにて開催いたします。参加登録方法・開催方法に関しては p.6 の「注意事項」をご覧ください。

※ 今大会は、アメリカ学会会員および招聘者に参加を限定いたします。ご了承ください。

※ 本プログラムが、第55回大会プログラムの最終バージョンとなります。

大会企画委員長 兼子 歩 ayumuk アットマーク meiji.ac.jp

会場責任者 大串 尚代 pcrs アットマーク flet.keio.ac.jp

## 2. プログラム(報告要旨は別に「報告要旨集」に掲載されます。時間は全て日本標準時です)

\* タイトルの日英別は、発表言語によるものです。

\* GS denotes “graduate student.”

第1日 2021年6月5日(土)

午前の部

自由論題報告 9:00 ~ 11:30

### 【 Session A アジアとアジア系アメリカ Asia and Asian America 】

Chair: Hisae ORUI 大類久恵 (Tsuda University 津田塾大学)

Masako HATTORI 服部雅子 (Shujitsu University 就実大学)

Discussant: Yuko KONNO 今野裕子 (Asia University 亜細亜大学)

Speakers:

Ayuko TAKEDA 竹田安裕子 (University of California, Irvine, GS)

“MIS Nisei in Saipan: Camp Susupe and Japanese American Incarceration during WWII”

Yuan SHU (Texas Tech University)

“Teaching and Theorizing Transnational American Studies in the Asia Pacific”

## 【 Session B メディア・言語・文化 Media, Language, and Culture 】

司会: 佐々木一恵(法政大学)・天野由莉(ジョンズホプキンス大学・院)

討論者: 塚田幸光(関西学院大学)・丸山雄生(東海大学)

報告者:

齋藤 寛子(ハワイ大学マノア校・院)

「野口米次郎の *The American Diary of a Japanese Girl* におけるアメリカ帝国主義批判」

谷岡知美(広島工業大学)

「詩と猥褻表現——J・L・オースティンの観点からみた『吠える』裁判(1957)における言語の猥褻性——」

Tamie KANATA 金田民栄 (Kaichi International University 開智国際大学)

“‘I Don’t See Color, We’re All Just Human Beings’: Interrogation of Color-Blindness in Students’ Online Intercultural Dialogues”

Mathieu DEFLEM (University of South Carolina)

“Celebrity Activism and Racial Justice in 2020 America”

## 【 Session C 対外関係・政府・非政府アクター Foreign Relations, Government, and non-Governmental Actors 】

司会: 中野博文(北九州市立大学)・相川裕亮(広島大学)

討論者: 山岸敬和(南山大学)

報告者:

齋藤崇治(東京大学・院)

「戦時大統領制と官僚統制——ポスト 9.11 アメリカにおける省庁間調整の拡大とその余波——」

中村信之(摂南大学)

「アメリカにおけるパブリック・ディプロマシーの黎明——カーネギー国際平和財団(CEIP)の国際関係クラブを題材に——」

休憩 11:30～12:30

### 午後の部

#### 第一部 Keynote Speech 12:30～13:30

Jae H. ROE (President, ASAK/Sogang University/President)

“The Polarizing Politics of Race and Class in *Black Panther* and *Joker*”

第二部 シンポジウム「表現の自由と不自由のあいだ」 13:40～17:10

司会：小林剛(関西大学)・小森真樹(武蔵大学)

報告：横大道聡(慶応義塾大学)

「アメリカにおける表現の自由の現在」

梅崎透(フェリス女学院大学)

「「自由」と「憎悪」のあいだで——言論の自由をめぐる 1960 年代以降の政治文化」

加治屋健司(東京大学)

「表現と芸術のあいだ——アメリカにおける「芸術の自由」」

大和田俊之(慶応義塾大学)

「ペアレンタル・アドバイザー ——アメリカの音楽と検閲」

吉本光宏(早稲田大学)

「映画、あるいは表現という不自由」

賛助会員からのお知らせ

アメリカ学会に賛助会員として加入していただいている出版社・書店からのお知らせです。以下をクリックして、ぜひ最新情報をお確かめください。

- ・ 株式会社 たかなし 小鳥遊書房

<https://www.tkns-shobou.co.jp/>

- ・ ProQuest “Black Freedom Struggles in the United States: Challenges and Triumphs in the Pursuit of Equality”

<https://blackfreedom.proquest.com>

- ・ 文生書院 アメリカを識る アメリカ学会様向け商品一覧ページ

<https://www.bunsei.co.jp/jaas2021/>

第2日 2021年6月6日(日)

午前の部

部会・ワークショップ 9:00～11:30

**【ワークショップ Politics of Gender and Sexuality: ASAK and JAAS Collaborative Workshop】**

Chair: Rui KOHIYAMA 小檜山ルイ (Tokyo Women's Christian University 東京女子大学)

Kyoko MATSUNAGA 松永京子 (Hiroshima University 広島大学)

Discussant: Hiroyuki MATSUBARA 松原宏之 (Rikkyo University 立教大学)

Speakers:

Shang E. HA 하상응 (ASAK/Sogang University)

“Civil Liberties vs. Civil Rights: Public Opinion in the Context of the Legalization of Same-Sex Marriage”

Yuki TAKAUCHI 高内悠貴 (University of Illinois, Urbana-Champaign, GS)

“Towards a Feminist Historiography of the US Occupation of Okinawa: Analyzing the Intersections of Power in Red-Light Districts during the Vietnam War”

Atsushi FUJITA 藤田淳志 (Aichi Gakuin University 愛知学院大学)

“‘America Has AIDS’: Passing Down the Legacy of a Community in Matthew Lopez’s *The Inheritance*”

**【部会 A Unpredictable Agents: The Making of Japan’s Americanists during the Cold War and Beyond】**

Chair: Mari YOSHIHARA 吉原真里 (University of Hawai‘i)

Discussant: Sayuri SHIMIZU 清水さゆり (Rice University)

Speakers:

Katsunori YAMAZATO 山里勝己 (Meio University 名桜大学)

“Memories of an Okinawan Americanist”

Eijun SENAHA 瀬名波栄潤 (Hokkaido University 北海道大学)

“American Paralysis: Floating Homeland, Family, and Masculinity”

Yujin YAGUCHI 矢口祐人 (University of Tokyo 東京大学)

“Learning ‘America’ from the Mennonites”

Yuko ITATSU 板津木綿子 (University of Tokyo 東京大学)

“The Accidental Mirror: The Shine and Shatter of My American Dream”

Sanae NAKATANI 中谷早苗 (Tokyo Metropolitan University 東京都立大学)

“The Land She Could Never Call Home Again: ‘America’ in My Family History”

Yu TOKUNAGA 徳永悠 (Kyoto University 京都大学)

“Making of a Transpacific Americanist via Latin America”

**【部会 B アメリカン・ファミリー ——多様な家族のすがた】**

司会 古井義昭(立教大学)・田ノ口正悟(早稲田大学)

討論者 豊田真穂(早稲田大学)

報告者

菅美弥(東京学芸大学)

「アメリカ・センサスと「家族」——1860年から1880年までの調査票にみる「家族」と人種の境界」

菅野優香(同志社大学)

「クイア・シネマにおける「家族」の再創造」

関口洋平(フェリス女学院大学)

「ホモ・エコミクスと動物と家族——レイモンド・カーヴァーの『ジェリーとモリーとサム』を読む」

休憩 11:30～13:30

分科会 11:40～13:20 (分科会の詳細はプログラムの後に掲載されています)

**賛助会員からのお知らせ**

アメリカ学会に賛助会員として加入していただいている出版社・書店からのお知らせです。以下をクリックして、ぜひ最新情報をお確かめください。

**明石書店 アメリカ学会会員向け書籍のご案内**

- ① 世界を動かす変革の力——ブラック・ライブズ・マター共同代表からのメッセージ  
[URL:https://www.akashi.co.jp/book/b555586.html](https://www.akashi.co.jp/book/b555586.html)
- ② アメリカ黒人女性とフェミニズム——ベル・フックスの「私は女ではないの？」  
[URL:https://www.akashi.co.jp/book/b75830.html](https://www.akashi.co.jp/book/b75830.html)
- ③ アメリカに生きるユダヤ人の歴史【上巻】——アメリカへの移住から第一次世界大戦後の大恐慌時代まで  
[URL:https://www.akashi.co.jp/book/b509130.html](https://www.akashi.co.jp/book/b509130.html)
- ④ アメリカに生きるユダヤ人の歴史【下巻】——ナチズムの登場からソ連系ユダヤ人の受け入れまで  
[URL:https://www.akashi.co.jp/book/b509131.html](https://www.akashi.co.jp/book/b509131.html)

午後の部  
部会 13:30～16:00

【 部会 C 米中貿易摩擦の行方——経済および歴史の視点から 】

司会 下斗米秀之(明治大学)・中村祥司(東京大学・院)

討論者 河崎信樹(関西大学)

報告者

唐成(中央大学)

「米中貿易戦争とは何か——中国経済の視点から」

藤木剛康(和歌山大学)

「トランプ政権の通商政策——労働者のための通商政策とは何か」

手塚沙織(南山大学)

「米中貿易摩擦が与える米中間のヒトの移動への影響」

【 部会 D 記憶される／忘却される暴力のアメリカ 】

司会 竹沢泰子(京都大学)・武井寛(岐阜聖徳学園大学)

討論者 遠藤泰生(関西国際大学)

報告者

坂下史子(立命館大学)

「BLMの時代における人種暴力の記憶形成——遺産博物館と平和と正義の記念碑を中心に」

西山隆行(成蹊大学)

「トランプ政権下のアメリカにおける暴力と犯罪」

三牧聖子(高崎経済大学)

「リベラルな盟主？——アメリカの見えない戦争」

### 賛助会員からのお知らせ

アメリカ学会に賛助会員として加入していただいている出版社・書店からのお知らせです。以下をクリックして、ぜひ最新情報をお確かめください。

株式会社 極東書店 アメリカ学会会員の皆さまへのご案内

<https://www.kyokuto-bk.co.jp/gakkai>

株式会社 彩流社 アメリカ学会会員の皆さまへのご案内

[https://sairyusha.co.jp/collections/jaas\\_tokusetsu](https://sairyusha.co.jp/collections/jaas_tokusetsu)

### 3. 注意事項

- 1) 今大会への参加は、学会からの依頼による登壇者を除き、アメリカ学会の会員に限らせていただきます。
- 2) 今大会は、Zoom(および予備として Webex)を使用するオンライン大会です。
- 3) 大会参加登録は、学会ウェブサイトの大会参加登録ページ上で、必ず 2021年5月30日(日)までにお願いたします。参加登録ページの URL は、アメリカ学会会員用メーリングリストにて配信いたします。会員の方でメールが届かなかった方は、「迷惑メール(junk mail)」フォルダもご確認ください。見つからなかった場合は、お手数をおかけして大変申し訳ございませんが、大会企画委員会(program アットマーク jaas.gr.jp)までご連絡ください。
- 4) 期日までにご登録いただいた方には、登録いただいたメールアドレス宛に、大会の各セッション・ミーティングに入室するための情報を大会開催前に配信いたします。期日までにご登録されなかった方にはミーティング情報は配信されず、当日の大会には参加できませんので、ご了承ください。
- 5) 今大会では理事会・評議会・総会は大会中に開催せず、別途メールによる審議でおこなう予定です。詳細については後日、あらためて該当者の皆様にご連絡いたします。
- 6) 今大会では清水博賞・中原伸之の授賞式は行いません。学会公式ウェブサイトでの受賞者の発表と賞状の郵送・賞金の振り込みに代えることとしますので、ご了承ください。
- 7) 今大会は懇親会を開催いたしませんので、ご了承ください。
- 8) このプログラムが最終版です。『会報』に掲載された情報と若干の違いがありますのでご注意ください。

## 第 55 回年次大会 分科会のご案内 6 月 6 日(日) 11:40～13:20

### 1.「アメリカ政治」

責任者:宮田智之(帝京大学) tomoyukimiyata アットマーク main.teikyo-u.ac.jp

報告 1:中橋友子(尚美学園大学・講)

「2016年大統領選挙における、トランプの営業技術」

報告 2:松本明日香(同志社大学)

「国際制度への再参画——トランプ政権とバイデン政権を比較して——」

報告 3:西住祐亮(中央大学・講)

「対ロシア政策をめぐる党派対立の変容」

本年度のアメリカ政治分科会は、3名の会員より、アメリカ政治の各分野における最新の研究成果を報告いただく。中橋会員は、「トランプ固有の属性」と捉えられる傾向の強いトランプの言動や行動の様式のなかには、ビジネスマンの技術や慣習に由来するものが多々あることを2016年大統領選挙の初期に焦点を当てることで明らかにする。松本会員は、国際機関・協定をめぐるバイデン新政権の特徴について、前トランプ政権との比較や、アメリカ国内の支持基盤及び国際機関の組織再編への着目を通じて分析する。西住会員は、トランプ政権の4年間で一定の変化を見せた対ロシア政策をめぐるアメリカ国内の対立図式について、主に共和党内の動きに焦点を当てながら考察する。

### 2.「アメリカ国際関係史研究」

責任者:水本義彦(獨協大学) mizumotoy アットマーク hotmail.com

テーマ:「ドイツ統一とNATO 東方拡大問題:ジョージ・H・W・ブッシュ政権の認識と実践」

報告者:志田淳二郎(名桜大学)

本分科会では、報告を志田淳二郎会員に、討論を森聡会員におこなっていただく。報告の要旨は以下の通りである。

近年の米ロ関係/NATO・ロシア関係の悪化の原因として言及されるのが、NATO 東方拡大である。ロシアは、ドイツ統一交渉時に、統一ドイツを NATO に加盟させる代わりに、アメリカはソ連に NATO を東方拡大させないことを約束したとし、約束を破り、NATO を東方拡大させたとアメリカを非難している。近年の、とりわけ米英における冷戦研究では、ドイツ統一交渉時に、このような約束が存在していたかの精査が行われている。本報告では、先行研究と未公刊資料を駆使し、ジョージ・H・W・ブッシュ政権がドイツ統一交渉時に統一ドイツの NATO 加盟問題および NATO 東方拡大をどのように認識し、実践したかについて検討する。本報告は、少なくとも、ドイツ統一交渉時に、地政学的発想と現実主義を重視するブッシュ政権中枢で、NATO 東方拡大の用意がされていなかったことを示す。

### 3.「日米関係」

責任者: 末次俊之(専修大学) suetoshi007 アットマーク gmail.com

テーマ:「日本の高速炉・新型炉関連施設が担う役割——高速増殖原型炉もんじゅについて」

報告者: 小伊藤 優子(国立研究開発法人日本原子力研究開発機構)

東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所事故は、原子力利用に対する日本国民の関心を高めることになった。こうした状況で日本政府は、原子力への依存度を低減する方針を示し、2016年12月には高速増殖原型炉もんじゅ(以下、「もんじゅ」と略記)の廃止措置を決定した。日本の高速増殖炉は、アメリカを盟主とする西側諸国と協力しつつ進められてきた。特に、財政的事情から高速炉開発の中断及び施設の閉鎖を余儀なくされたイギリスは、「もんじゅ」を、自国の技術維持と核不拡散に資するプルトニウム管理技術を確認するためのプラントとみなしていた。本報告では、「もんじゅ」開発に携わってきた国内外の技術者へのオーラル・ヒストリーをもとに、日米関係において「もんじゅ」が担っていた役割を浮かび上がらせる。

#### 4.「経済・経済史」

責任者: 名和洋人(名城大学) nawa アットマーク meijo-u.ac.jp

テーマ:「軍事戦略の立案および遂行と戦時経済体制の相互作用の検討——第二次世界大戦期アメリカ合衆国の戦略爆撃作戦」

報告者: 藤田怜史(明治大学)

第二次世界大戦においてアメリカ合衆国は大規模な戦略爆撃作戦を展開し、ヨーロッパ戦線では270万トン、太平洋戦線では65万トンもの爆弾を投下した。これほど大規模な作戦の実施が可能であったのは、戦時経済体制において、長距離爆撃機を中心とした兵器が大量に生産されていたためであった。しかし、アメリカの戦略爆撃に関する従来の軍事史や戦略史では、戦略爆撃のような軍事戦略の立案および実行と、兵器供給のための政策等との関連性が考慮されることはあまりない。本報告は、アメリカが参戦前、そして戦争初期に戦略爆撃についてどのようなグランド・デザインを描いており、それが航空機等の生産計画の立案をどのように方向づけたのか、また、航空機、とりわけ長距離爆撃機の生産状況が、実際の戦略爆撃作戦の実施のあり方にどのような影響を与えたのかを検討し、軍事戦略の立案および遂行と戦時経済の間の相互作用を明らかにするものである。

#### 5.「アジア系アメリカ研究」

責任者: 野崎京子(京都産業大学) kyoko.nozaki.103039 アットマーク gmail.com

テーマ:「越境するベトナム——Viet Lê のクイアな映像芸術」

報告者: 麻生享志(早稲田大学)

本報告では、ベトナム系難民映像芸術家 Viet Lê のビデオ三部作 Love Bang! 2012-16 を中心に、サイゴン陥落から間もなく半世紀を迎えようとする難民芸術に見られるクイアな表象について論じる。すでに1990年代より俗に1.5世代と呼ばれる難民芸術家が幅広いジャンルで活動をはじめていたが、21世紀に入ってからベトナム系の活躍が目覚ましい。その特徴は敗戦後の脱越の悲劇を起点とし、「越境」を主題にする作品制作にある。とくに戦後の時空間を縦横無尽に交差する史実と虚構の融合が、戦争の記憶という形で刻印されてきた。

レの作品においても、同様の特徴が顕著に見られる。加えて、アメリカからベトナムをはじめとするアジア諸国

へ再越境することで、現地芸術家とのコラボレーションを実現する映像作品 Love Bang! においては、戦争の記憶と彼自身のクイアな感性が融合することで、他の芸術家作品には見られない「越境」世界を映し出す。本報告では、アメリカ文化とベトナム文化の融合だけではなく、汎アジア的要素も備えるレの芸術的特徴について論じる。

## 6. 「アメリカ女性史・ジェンダー研究」

責任者: 鈴木周太郎 (鶴見大学) shutarosuzuki アットマーク me.com

テーマ: 「『自由な愛』はなぜ問題なのか? ——19 世紀アメリカにおけるフリーラブをめぐる論争——」

報告者: 箕輪理美 (東京福祉大学)

1850 年代のアメリカで生まれたフリーラブ運動は、結婚やセックス、そして自由の意味を再構築し、男女平等を実現しようとするラディカルで画期的な試みだった。しかし、この運動が大衆的な出版文化の中で大々的に取り上げられ批判を受けるようになるにつれ、「フリーラブ」という言葉は一人歩きを始め、当時の様々な政治的論争の中に登場するようになった。そこでは、「フリーラブ」は支持者たちが定義していたものとは異なる意味を付与され、(しばしば運動と全く関連のない) 様々な人々を中傷するために使われた。本報告では、報告者の博士論文での議論を概観し、1850~80 年代のアメリカ社会一般で流布していた「フリーラブ」の表象を紹介することを通じて、いかに結婚やジェンダー、セクシュアリティについての言説が政治的論争の中心要素であったかということ論じたい。

## 7. 「アメリカ先住民研究」

責任者: 佐藤円 (大妻女子大学) mdsato アットマーク otsuma.ac.jp

テーマ: 「貧困との闘い——アメリカ先住民社会における経済活動と貧困とネオ・トライバリズム」

報告者: 野口久美子 (明治学院大学)

近年、セトラー・コロニアリズム国家における先住民社会の一側面を「ネオ・トライバリズム」の概念から読み解こうとする試みが行われている。アメリカでは 1960 年代からのマイノリティによる復権運動が先住民のための複数の立法措置とその政治的発言権の回復につながった。しかし 80 年代以降も「圧倒的な貧困」はアメリカ先住民社会の課題として残り続けた。背景には連邦予算に深く依存する部族自治がある。一方でマイノリティ・キャピタリズムの推進にみられるアメリカの新自由主義的な福祉政策とカラーブラインド社会の脱福祉依存への圧力は、結果として部族社会の急激な経済発展を可能とし、先住民社会を大きく変容させつつある。本報告はアメリカにおける「ネオ・トライバリズム」の歴史的・社会的背景と現代の諸相を整理することで、ポスト・レッドパワー運動期に構築された国家と先住民の新たな関係性を考える。

## 8. 「初期アメリカ」

責任者: 笠井俊和(群馬県立女子大学) toshi\_ks アットマーク mail.gpwu.ac.jp

テーマ: 「複合君主政から人民主権国家へ——革命期から強制移住期までのアメリカ先住民諸部族の国制上の地位——」

報告者: 塚田浩幸(東京外国語大学・院)

コメンテーター: 金井光太郎(東京外国語大学・名)

アメリカ先住民にとって、アメリカ独立革命は災難であった。とくに国制的観点では、先住民諸部族も対等に包含する複合君主政から、先住民のような他者に対して排他的になる人民主権国家への根本的転換が起きることとなった。ただ、1810年代の戦争が終わるまでは、先住民ならびに他のヨーロッパ勢力に囲まれ、アメリカ人はそのような排他的構想を実行に移すことができなかった。まさにこのことは、抵抗勢力の強さならびに様々な勢力がひしめく国際環境の都合から各地域の伝統的統治体制の残存を論じる複合君主政論に消化させることが可能である。1990年代以後の初期アメリカ史研究では、先住民論的転回によって、当時強力なプレゼンスを誇っていた先住民が初期アメリカの中心に据えられるようになった。ただ近年はヨーロッパの帝国への関心も再び高まっており、本報告はそれらの潮流の融合として、先住民・ヨーロッパ人関係への複合君主政論の適用を進めたい。

## 9. 「文化・芸術史」

責任者: 小林剛(関西大学) go アットマーク kansai-u.ac.jp

報告 1: 森川智成(金沢大学)

「コミック『Journey of Heroes』とハワイにおけるセトラー・コロニアリズム」

報告 2: 渡部宏樹(筑波大学)

「第二次大戦前のカリフォルニア農業共同体の「日本人ホール」における日系移民の映画上映と文化活動」

今回の分科会では「日系アメリカ人の文化表象」をテーマにして二人の研究者に報告を行ってもらおう。森川智成氏は、第二次大戦中に組織された日系アメリカ人部隊である「442 部隊」を題材にしたコミック Journey of Heroes: The Story of the 100th Infantry Battalion and 442nd Regimental Combat Team (2012)に着目することで、その生産・流通・消費過程の考察を通じ、日系アメリカ人とネイティブ・ハワイアンとの表象に起因する政治的対立関係について考察していく。また、渡部宏樹氏は、1910年代から20年代にかけて盛んに建設された「日本人ホール」と呼ばれる施設とそこで行われていた文化活動の姿を、サンフランシスコとロサンゼルスで発行されていた邦字新聞をもとに浮かび上がらせることによって、日系移民の映画をはじめとする文化活動の歴史を考える際の農業共同体の重要性を議論する。両報告とも「記憶」、「文化」、「政治」の交錯点をアメリカの文脈のなかで探っていくことを目的としており、メディアが創造(=想像)する歴史認識を考察するうえでも非常に意義深いセッションになるはずである。

## 10. 「アメリカ社会と人種」

責任者: 戸田山祐(大妻女子大学) tasukutodayama アットマーク hotmail.com

テーマ: 「拙著『ハリエット・タブマン——「モーゼ」と呼ばれた黒人女性』(新曜社、2019 年)と映画『ハリエット』  
(ケイシー・レモンズ監督)をめぐって」

報告者: 上杉 忍(横浜市立大学・名)

拙著『ハリエット・タブマン——「モーゼ」と呼ばれた黒人女性』(新曜社、2019 年 3 月)の出版の経緯と、その特徴について、および、その後、考えたことについてお話します。また、2020 年 3 月末から日本で全国上映された映画『ハリエット』について、その史実との食い違いとその意味なども含めてコメントしたいと思います。トランプ政権下でペンディングになっていたアメリカ 20 ドル紙幣へのハリエット・タブマンの肖像掲載計画が、バイデン政権でどのような変化を見せているのかについても触れたいと思います。そして最後に、一般読者を引き付ける「歴史書」を書くためには、どのような工夫が必要なのか、皆さんと共に考えることができれば幸いです。